イチゴ「さがほのか」の大分高設栽培に適した施肥設計の検討

農業研究部

1. 研究の背景

大分県のイチゴの平均単収は3.2t/10a（平成23年度）と低い状況にある。また、本県のイチゴ高設栽培に適した施肥基準が明確にされておらず、施肥基準を選定する必要がある。

そこで本課題で大分県イチゴ高設栽培に適する施肥設計の検討を行った。

2. 研究成果の内容・普及のポイント

緩効性肥料区は慣行区に比べ、収量が12%増え、平均一果重は1.5g重くなった（図1、表2）。また、マルチ肥が必要ないことから定植前にマルチをする生産現場でも利用できる。排液ECについては慣行区は定植初期の排液ECが高く1ヶ月以内に急激に下がっており、窒素のほとんど定植初期が流出してしまっていると考えられた。

表1　施肥設計

	慣行区		緩効性肥料区	
	肥料名	施肥量（g/株）	肥料名	施肥量（g/株）
元肥	SL140	10.0	SL180	10.7
	CDUS555	3.0	LT180	14.0
	ミネパワーS	3.0		
マルチ肥	SL140	8.0	なし	

注）SL：ｽｰﾊﾟｰｴｺﾛﾝｸﾞ　LT：ﾛﾝｸﾞﾄｰﾀﾙ

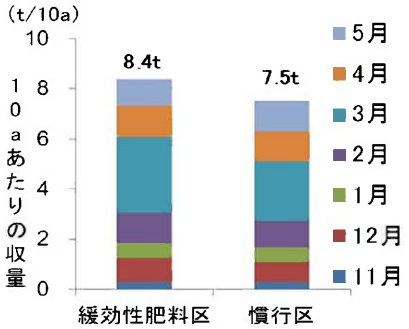

図1　収量

表2　可販果数および平均一果重

試験区	可販果数	内訳（個/株）		平均一果重
	（果/株）	20g以上	8～20g	（g/果）
緩効性肥料区	54.6	19.8	35.2	18.4
慣行区	53.9	17.3	37.2	16.9
分散分析結果	n.s	n.s	n.s	n.s

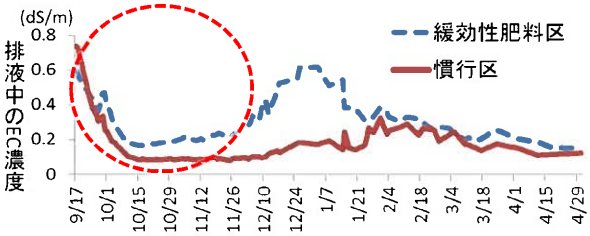

図2　排液ECの推移

3. 期待される効果

緩効性肥料を使用することで平均一果重が重くなり、5月末までの合計収量が12%増加する。また、マルチ肥を必要としないため作業の効率化につながる。

4. 担当機関連絡先

農業研究部　果菜類チーム
TEL：0974-28-2081
住所：豊後大野市三重町赤嶺2328-8